

③「吹奏楽部の演奏音がうるさい！ さあ、どうする？」

～対立と合意、司法の役割～

●主に対応する学習指導要領 公民的分野
内容 A 私たちと現代社会 (2)現代社会を捉える枠組み ア(ア)現代社会の見方・考え方の基礎となる枠組みとして、対立と合意、効率と公正などについて理解すること。
内容 C 私たちと政治 (2)民主政治と政治参加 ア(ウ)国民の権利を守り、社会の秩序を維持するために、法に基づく公正な裁判の保障があることについて理解すること。

●主に対応する帝国書院公民教科書 単元名・対応ページ			
部	章	節	ページ
第 1 部 現代社会	第 2 章 現代社会を捉える枠組み		p. 21-22
第 2 部 政治	第 2 章 民主政治	第 2 節 国の政治の仕組み	p. 87-88

第 I 部 指導案（2 時間扱い）

1 授業のねらい

- (1) 学習指導要領公民的分野の内容 A (2)「現代社会を捉える枠組み」では、「対立と合意、効率と公正などに着目して、課題を追究したり解決したりする活動」を通して、「現代社会の見方・考え方の基礎となる枠組みとして、対立と合意、効率と公正などについて理解すること」、「人間は本来社会的存在であることを基に、個人の尊厳と両性の本質的平等、契約の重要性やそれを守ることの意義及び個人の責任について理解すること」が求められています。
- (2) そこで、ここでは生徒にとって身近な例、どこの学校でも起こりそうな例を取りあげ、社会生活における「対立」と「合意」、ルールづくり、その場合の判断基準になる「公正」と「効率」などについて演習を通して理解させたいと考えました。
- (3) 内容 A (2)「現代社会を捉える枠組み」は、これ以降の学習の基礎となる内容をふくむものとなります。そこで、ここで扱う内容に最も関係深い内容 C (2)「民主政治と政治参加」の中の「法に基づく公正な裁判の保障」と結合させた展開をはかり、より高い教育的効果をねらっています。
- (4) 紛争解決の方法として当事者間のルールづくりがあること、それで解決できなかった時に、法に基づく裁判があることまでの流れを 2 時間扱いで学ぶことにより、「対立」と「合意」などの現代社会をとらえる見方や考え方と、裁判制度の双方の理解がより深まることが期待できます。

2 生徒に身につけさせたい法教育的な見方・考え方

人が社会的存在であるかぎり、生徒たちのまわりにも日常的に「対立」があり、それを解決して「合意」に至る必要や大切さは感じていると思います。その経験を広げ、社会生活を営むうえで理解しておきたいことを法的な視点で整理させてみようというのがこの時間の趣旨です。

この授業を通して生徒に身につけてほしい力は、次のようなものです。

- ① なぜルールが必要なのか理解できる。
- ② 公正なルールを作るとき考えなければならないことが理解できる。
- ③ ①②をふまえてルールを作る力がつく。
- ④ 紛争解決にはどのような方法があるのか、状況に応じて方法を考える力がつく。
- ⑤ 紛争解決の方法としての民事裁判について理解を深めることができる。
- ⑥ 以上のようなことを日常の社会生活にいかしていくことができる。

3 指導計画【1時間目】

	学 習 活 動	指導上の留意点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの事例1を読み、自分たちの身のまわりの社会生活の中で、これと似たようなできごとをワークシートに書き出し、みんなで発表し合う。 ・このような対立を解決するためにはどのような方法があるか出し合ってみる。 →当事者同士の話し合い、ルールづくりなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・騒音問題だけでなく日常生活にいろいろな「対立」があることに気づかせる。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・事例の解決策をワークシートの手順にしたがって、みんなで考えてみる。 問題点の整理 →それぞれの言い分 対立点 「合意」に向けて →どうしたら解決がはかれるか、吹奏楽部員と近隣の人々の2グループに分けて話し合いを行う。 →話し合い内容を両者の約束ごと（ルール）としてみんなでまとめてみる。 ・でき上がったルールを黒板に書き出し、適切なものであるか、何を大切にすべきかみんなで検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・最初にグループごとに話し合い、その後全体で話し合う。 ・「エアコン設置」の意見が出たら、事例2を念頭に置き「すぐには設置できない」として、他の方策の検討を促す。 ・手続きの公正さ、機会や結果の公正さ、遵守の大切さなどに気づかせる。
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・ルールづくりをしての振り返り（感想）を書く。 ・「対立」を「合意」に結びつける努力の大切さと、社会生活を営むうえでこのような解決能力が必要とされることを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・時間がない場合は宿題にする。 ・次時へつながるように支援する。

【2時間目】

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前時のルールづくりの感想をいくつか出し合ってみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 難しかったことなども引き出す。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・ もし、当事者同士の話し合いやルールづくりで解決がはかれなかった場合、ほかに方法がないかみんなを考えてみる。 <p style="text-align: center;">仲介者→この方法のよい点は？誰がよいかな？ どんな案がでるだろう？</p> <p style="text-align: center;">裁判？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシート2の第三者による判断で重要なことを考えることにより、最終的に解決しない場合の方法として裁判の必要性とその根本となる考えに気づく。 ・ 教科書を参考に、裁判制度について、ワークシートの穴埋め問題をやってみる。 ・ ワークシートの事例2を配布し、この事例を、ワークシートで裁判の実際にあてはめてみる。その流れを教科書の図などを使って理解する。 ・ それぞれの紛争解決の方法について、よい点や気をつけなければならないことをワークシートにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ すぐに裁判に持ち込むことはしないで仲介者（例えば町会長さん）を入れての解決方法を促す。 ・ 民事裁判には和解があることも理解させる。
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・ 紛争解決が当事者の利益のバランスを回復する目的であることや、紛争解決における公正な態度・意欲の大切さを確認する。 ・ この2時間についての振り返りを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 次は刑事裁判について学習することを告げる。 ・ ワークシートの感想には、自分の考えの変化や、自分と裁判との関わりについて記述できるよう支援する。

4 評価（事例1、2を通して）

観点別評価
○知識・技能 ・人間の社会生活には「対立」があることに気づき、いろいろな人が社会集団の中で共に成り立ちうるように「合意」に至る努力がなされていることが理解できたか。
○思考・判断・表現 ・紛争解決にむけて課題を整理し、的確な判断ができたか。
○主体的に学習に取り組む態度 ・対立点を見つけて、その紛争の解決方法について、自分のこととして捉えて考えようとしている。

主体的に学習に取り組む態度をみとる具体的な生徒の姿の例
○B 規準の例 ・ワークシート1の1、2、ワークシート2の6に、対立と合意にあてはまる事例をいくつか取り上げることができる。
○A 規準の例 ①内容が明確であること ②自由を過度に制約しないこと ③平等であること ④正しい手続きで定められていること を意識して、自分たちの身近にあるルール（ごみの出し方、公園の利用方法など）をめぐる対立について、自分なりに合意形成にむけた提案を考えようとしている。

第Ⅱ部 ワークシート

「吹奏楽部の演奏音がうるさい！ さあ、どうする？」

～対立と合意、司法の役割～ 1 (1時間目用)

組 番 名前

事例 1

AさんはB市立C中学校の吹奏楽部員です。C中はコンクールではいつも上位入賞校で、それだけに練習は活発です。夏休みも毎日のように朝から夕方まで練習が続いていました。ところが、その演奏音がうるさいと近隣の方から校長先生にクレームが寄せられました。中にはそのために不眠症にかかって病院通いするお年寄りも現れ、「演奏をやめてほしい」との声が大きくなりました。困った校長先生は顧問の先生と相談し、教室の窓をしめて練習することにしました。音はいくぶん小さくなりましたが今度は暑さのためにAさんを始め数人の部員が熱中症にかかって病院に運ばれる事態となり、練習も満足

にできず、部員や保護者から不満が爆発しました。
このままではコンクールでもよい成績をおさめるのが難しくなり
そうで、どうしたらよいか頭を痛めています。



1 自分たちの身のまわりで事例1とよく似たできごとを3つあげてみよう。

①

②

③

2 1のような対立を解決するにはどのような方法があるだろうか、書き出してみよう。

3 事例1の問題点を整理してみよう。

①吹奏楽部員や部員の保護者の言い分は？

--

②近隣の人たちの言い分は？

--

③対立点はどこにあるの？

--

4 解決方法を考えてみよう。

①吹奏楽部員グループの考え

②近隣の人グループの考え

--	--

③みんなで話し合って作ったルールを書き出してみよう。

--

④③のルールを見て、あなたの自身の考えを書いてみよう。

⑤適切なルールづくりをするために気をつけなければならないことは何だろうか。

5. ルールづくりのふりかえりをしてみよう。

①ルールはどうして必要なのだろうか。

②感想

「吹奏楽部の演奏音がうるさい！ さあ、どうする？」

～対立と合意、司法の役割～ 2（2時間目用）

組 番 名 前 _____

- 1 当事者同士の話し合いやルールづくりで解決しない場合、他にどのような方法があると思いますか。

- 2 間に立つ第三者が判断し、紛争解決する場合に重要なことを考えてみよう。

- ① 第三者はどのような人がよいですか。

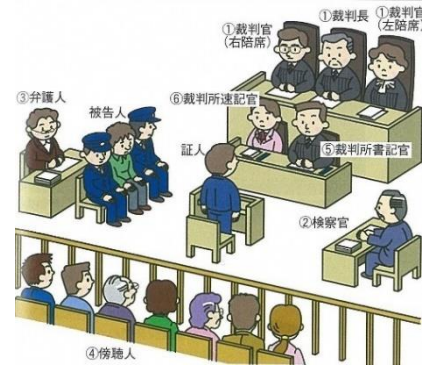
- ② 第三者は、判断するためにすべきことは何ですか。

- ③ どのような基準で判断したらよいですか。

- ④ その基準は誰が決めたらよいと思いますか。

3 裁判についてまとめた下の文中の（ ）の中に適すことがらを入れてみよう。

私たち国民は、権利がおかされたと考えたときに裁判を受ける権利が（ ）第 32 条によって保障されています。裁判は（ ）によって実施されます。裁判には、私人間の権利・義務の対立を解決する（ ）裁判と、犯罪の事実があったかどうかを判断し、あった場合は科す刑罰を決める（ ）裁判があります。いずれも憲法や国会で決められた（ ）にもとづき判決が下されます。



事例 2 (その後の状況)



校長先生、顧問、部員代表、保護者代表と近隣の人との話し合いが何回もなされましたが、なかなか合意にいたりません。話し合いで出た、エアコンの設置を教育委員会に要請したのですが、予算の関係で設置はしばらく先になるとのことでした。話し合いもできない状態の中、コンクールの日がせまってきました。

校長先生はなやんだ末、見切り発車で練習の再開を許可しました。

4 事例 2 を読み、この事例を確認してみよう。もし近隣の人が裁判に訴えたなら・・・

① 民事裁判、刑事裁判どちらの裁判ですか。

② 原告は誰ですか。

③ 被告は誰ですか。

④ 原告や被告の代理として、その人の利益を守るために活動するのは誰ですか。

⑤ 判決を下すのは誰ですか。その人は判決を下すためにどんなことをしますか。

- 5 これまで学習してきた紛争解決の方法を書き出し、それぞれのよい点や気をつけることについてまとめてみましょう。

- 6 この2時間の学習で学んだルールづくりについて、身近な事例に関連させて、大切なことや、問題点、疑問点などを書いてみよう。

第Ⅲ部 弁護士からのアドバイス

【1時間目】

1 ルールとは何か

人はだれもが幸福に生きる権利をもっています。「幸福」とは、人それぞれ概念の違う言葉だと思いますが、少なくとも、人は、幸福になるために、自由でなくてはなりません。

人は自由でなくてはならない、というのは、二つの意味があります。一つ目は、人は人として生まれてきた以上、みな等しく、自由をもっている、ということです。「幸せとはこうあるべき」ということすらおしつけられることはなく、何が自分にとっての幸福かも自分で選べる、ということです。二つ目は、人はみんな異なる、ということです。人は、個性をもち、同じ人は誰一人としていません。個性に優劣はありません。

ところで、人は等しく自由をもち、かつ、それぞれ個性をもちているとすれば、人が考える「幸福」というのも、立場により、当然異なるということになります。ここに、「幸福（自由）」と「幸福（自由）」の衝突が起こると言えます。衝突が起こったときに、それを放置してしまえば、力の強い者が勝つことになってしまいます。しかし、それでは、一方にとっては「幸福（自由）」でも、他方にとっては「幸福（自由）」といえません。そのため、人の「幸福（自由）」が衝突したときに、それを調整するためのツールが必要になります。このツールのことを「ルール」といいます。

2 公正なルールとは何か

ルールとは、幸福（自由）と幸福（自由）が衝突したときに、それを調整するものといいました。ところが、そのルールが、力の強い者が勝ち、力の弱い者の自由が過度に制限されてしまうような内容であれば、公正なルールとはいえません。

そして、ルールは、誰にもひとしく平等でなければなりません。ある特定の者だけを縛る内容のものであれば、これも公正とはいえません。

最後に忘れてはならないのは、ルールは、正しい手続きによって定められている必要があります。ルールが幸福の衝突する場面でのツールである以上、誰かの自分勝手な考えによって作られてしまったら、そのルールが本当に公正なものなのかどうか分からなくなってしまいます。

そこで、ルール作成のポイントとして、まずは以下の4つのポイントに注意してください。

- ① 内容が明確であること
- ② 自由を過度に制約しないこと
- ③ 平等であること
- ④ 正しい手続きで定められていること

以上の4点が守られている上で、そのルールに罰則が定められている場合には、さらに、罰が厳しすぎないか、ということも検討するようにして下さい。そもそもルールとは自由を守るためにあるものなのに、罰があまりに厳しすぎると、かえって人の自由が阻害されてしまうからです。

以上のことが守られて、初めて「ルールが公正である」ということができます。

3 まとめ

今回の教材では、実際にルールを生徒達に作ってもらうことになります。

ルールを作るにあたって、考えて頂きたいのは、ルールは自由と自由が衝突したときに、

それを調整するためのものである、ということです。そこで、まず、ルールを決めるにあたって、当事者それぞれが、どういう自由をもっているか、ということを検討してください。

今回の事例では、まずひとつに、吹奏楽部部員や保護者の立場から、どういうことを言いたいのか、ということを考えるべきでしょう。吹奏楽部部員や保護者の立場からすれば、自由に演奏の練習をしたいと考えるというのが相当でしょう。次に考えなければならないのは、近隣のお年寄りがどう考えるのか、ということに思いをはせるのが必要でしょう。そして、今検討した、吹奏楽部部員や保護者の「自由」と、近隣のお年寄りの「自由」を調整するために、どのようなルールが必要なのか、ということを考える、ということになります。このルールを作るにあたっては、前述した、①内容が明確であること、②自由を過度に制約しないこと、③平等であること、④正しい手続で定められていること、の4点に注意するようにしてください。

【2 時間目】

1 紛争が起こった場合にどのような解決方法があるか

さて、これまでルールとは何か、今回の事例で適切なルールとは何か、ということについてお話ししました。次に考えるべきなのは、実際に紛争が起こったら、どのような解決方法があるか、ということです。

最初に考えられるのは、「自力救済」ということです。これは、自分の権利は自分で守るという考え方を最も強く打ち出したものであり、他人の権利を侵害しても自分の権利を守ろうとするものです。しかし、自力救済は、結局、力の強い者の自由が守られるというだけのことになってしまいますので、よくありません。

次に考えられるのは、本人同士の話し合いによる解決です。本人同士で話し合い、話がまとまるのであれば、一番よい解決方法といえるかもしれません。もちろん、本人同士の話し合いでも、力の強弱によって、一方に有利な内容の話し合いの結果になってしまう可能性もありますが、他方もそれに納得するのであれば、自由が不当に制約されたということはありませんので、よい方法と言えます。

しかし、紛争の内容によっては、話し合いによっては解決できない場合もあります。たとえば、紛争の本人同士でいがみ合っていたり、話し合いが平行線をたどってしまっていたりする場合などです。

この場合は、仲介者を入れての話し合いが考えられます。本人同士では、感情的になって話し合いができなくなったとしても、間に第三者を挟むことで、話し合いがスムーズに進むことがあります。なお、裁判所にも「調停」という手続きがあり、調停では裁判所が間に入って、話し合いを続けることになります。

さて、では、仲介者を入れても、なお話し合いがつかない場合はどうしたらよいでしょうか。この場合には、当事者間の話し合いによる解決ではなく、第三者が結論を判断し、本人同士はそれに拘束される、という方法がよいでしょう。裁判所における「訴訟」手続きが、これにあたります。言い換えると、訴訟とは、紛争の当事者以外の第三者を関与させ、その判断を仰ぐことで紛争を解決すること、またはそのための手続きのことをいいます。

ちなみに、訴訟の中には、行政訴訟というものがあります。行政訴訟というと、紛争の一方当事者が行政である場合の訴訟のことを言うと勘違いされることがありますが、一方当事者が行政の場合でも行政訴訟になるとは限りません。行政訴訟とは、行政事件に関する訴訟のことをさし、公権力の行使の適法性を争うものをいいます。例えば、公権力の行使について、その取り消し・変更などを求めたりするものです。従って、たとえば公権力の行使

とは言えない場合には、行政訴訟とはならないのです。では、今回の事例ではどうでしょうか。たしかに紛争の一方当事者は公立中学ですから、一見、行政訴訟になると思いがちです。しかし、公立中学における吹奏楽部の演奏は、学校の教師と生徒の間では公権力の行使が問題になる場合があるとしても、近隣の人達には公権力を行使しているわけではありません。したがって、今回の事例では、公立中学を舞台にはしていますが、行政訴訟にはならないのです。

2 実例

さて、実は今回の事例によく似た事案が、平成19年に起こっています。東京都の西東京市にあるA公園に噴水があり、そこで生徒達が遊んでいたところ、近隣に住むお年寄りが「騒音に悩まされている」として、裁判所に訴えた、という事案です。このお年寄りには病氣療養中であり、当時不整脈や不眠の症状が出ていたということでした。

公園で生徒が遊ぶのは自由とも言えますが、このお年寄りとしては生徒の音が騒音として聞こえ、病気が悪化する危険もあったわけですから、このお年寄りの自由も守らなければなりません。

結論を言えば、裁判では、噴水で生徒が遊ばないようにすることは可能だったのにそれを西東京市は怠ったとして、噴水の使用を禁止しました。そして、現在では、西東京市と近隣住民との話し合いにより、噴水の使用が再開されたとのこと（平成23年7月12日日本経済新聞夕刊参照）。

3 一歩先へ～高等学校で学ぶ「公共」とのつながり

高等学校で学ぶ「公共」の学習指導要領では、内容A「公共の扉」の(2)「公共的な空間における人間としての在り方生き方」において「幸福、正義、公正などに着目して」との見方考え方が入りました。

中学校では、幸福と幸福の「対立」を「合意」によって解決すること、その合意を「公正」の視点で検証することを学びます。これに対し高等学校では、社会の課題について全ての人にとって望ましい解決策を考えることを「合意」に限定されないより広い意味での「正義」の問題と捉え、この正義を「公正」の視点で検証します。

このワークでは、幸福と幸福が衝突した場合に合意での解決を目指し(1時限目)、それが叶わない場合の裁判制度を扱います(2時限目)。合意と裁判(合意以外の紛争解決手段)の関係を意識することにより、高等学校の学習への橋渡しとすることができます。

第Ⅳ部 授業づくりのポイント

1 ねらいをはっきりさせましょう

- (1) この授業では現代社会にはさまざまな「対立」があることと、それを「合意」に至らしめる大切さや方法を法教育的に学ぶことをねらいとしています。
身近な事例を取りあげることで、段階に応じた紛争解決の方法を、将来にわたる自分の問題として考えさせたいものです。
- (2) 紛争解決の最終手段である裁判について、単に制度について理解するにとどまらず、そこに至るまでの当事者による話し合い、ルールづくり、調停などを考えることにより、自分と社会との関係において、より本質的な理解ができることが期待できます。
- (3) 紛争解決には「効率と公正」の基準があり、それは裁判の中にも生きていることを理解させましょう。また、「対立と合意」「効率と公正」は学習指導要領公民的分野の内容A(2)以降で常に扱っていくことを確認しましょう。

2 指導の工夫をしましょう

学習指導要領の内容A(2)「現代社会を捉える枠組み」と内容C(2)「民主政治と政治参加」の(ウ)を合わせて2時間扱いで双方の内容理解がより深まるように工夫してみた授業例です。

内容A(2)で扱えば「現代社会を捉える見方・考え方」の具体例として、「裁判」を捉える色合いが強くなります。内容C(2)(ウ)の「裁判」で扱えば、「民事裁判」を捉える基本に「現代社会を捉える見方や考え方」があることの確認の色合いが強くなります。

どちらで扱ってもよいのですが、大切なことは「・・・見方・考え方」が「裁判」の中にも生きていることを理解させることです。場合によっては、切り離して行う授業計画にならざるをえないこともあると思いますが、その場合は既に学んだ、1時間目の学習確認をしっかりと行ってから後半に入ることが大切です。

3 授業の進め方

【1時間目】

〈 導 入 〉

- ・「対立」は学校生活、家庭生活、地域での生活の体験からどんどん発言させてみましょう。
- ・「対立」をどのように「合意」にもっていったか体験を出させれば方法はいくつも出てくると思われます。ぜひ、自分の身近な問題として考えるきっかけをつかませたいところです。

〈 展 開 〉

- ・吹奏楽部員グループと近隣の人グループの作り方は4～5人を1グループとして複数のグループにして話が深まるようにしましょう。ルールづくりについてはクラス全体でもよいし、二つのグループを組み合わせさせて作成させてもよいと思います。状況に応じて選んで下さい。
- ・ルールづくり(合意)の妥当性の判断基準として「効率」「公正」がありますが、この事例の場合「効率」は考え方が難しいので、一般的に紹介するにとどめましょう。

〈 まとめ 〉

- ・「対立」を「合意」に結びつける努力と能力が現代社会では大切であることを確認しておきましょう。
- ・指導者としては、必ずしも合意に至らない可能性が多々あることを留意しておく必要があります。

【2時間目】

〈 導入 〉

- ・素直な感想を述べさせるなかでルールづくりや、それを守ることの大切さを引き出しましょう。

〈 展開 〉

- ・解決方法で仲介者を入れての話し合い、調停などを引出し、いきなり裁判にいかないようリードしましょう。身のまわりの体験をもとに考えさせることで気づくはずです。
- ・仲介者を入れての判断で重要なことをしっかり考えさせてください。
 - どんな人が→中立公平な人
 - やるべきこと→双方の言い分を聞く
 - 判断基準→誰でも認める公正なもの（法）
 - 誰が基準（法）を決めるか→みんなで決めるなど追いかけていけば、裁判の根本的な考え方の理解につながります。
- ・裁判制度の理解には、教科書にある図や写真を活用すると効果があがります。

〈 まとめ 〉

- ・2時間の授業を通してのまとめ（振り返り）であることを意識させることが大切です。
- ・自分の思いや願いと、他者とが対立したり、社会の利益と一致しなかったりする場合などに、話し合いが大切なのだということを感じとらせて欲しいと思います。